

[教育実践報告]

「基礎演習」における「女性学ゼミ」の実験(4)

小 森 治 夫

はじめに

- I. 「基礎演習」における「女性学ゼミ」の概要
 - II. 「基礎演習」において鑑賞したビデオ
 - III. 学生による「女性学ゼミ」の評価(1)
 - IV. 学生による「女性学ゼミ」の評価(2)
 - V. 学生による「女性学ゼミ」の評価(3)
- おわりに

はじめに

前号(『商経論叢』第49号)では、「『基礎演習』における『女性学ゼミ』の実験」と題する拙論において、「女性学」をテーマにとりあげた「基礎演習」におけるゼミナール活動(1998年4～7月)について簡単な報告をした。

それに続いて、この小論においては、今年(1999年)の4～7月に行った、1年生の「基礎演習」における「女性学」ゼミの実験について報告することとしたい。

I. 「基礎演習」における「女性学ゼミ」の概要

まず、商経学科の教育体系の中で、「基礎演習」がどのように位置づけられているかについて、簡単に説明しておきたい。

「基礎演習」は、第一部1年生の前期に行われるゼミナール入門編である。「基

「基礎演習」では、大学における学問と研究の方法、すなわち、ゼミ活動の中心をなすレジュメのまとめ方と報告の仕方、ゼミ討論の組織の仕方、そして個人研究テーマの選び方、文献検索の方法、論文の書き方などを、コンピュータの活用方法を含めて学ぶ。また、「基礎演習」には、友だちづくりの基礎単位としての意味をももたせようとしている。

後期からは、本格的なゼミナール活動である「演習Ⅰ」が始まる。各教員はゼミナールのテーマを掲げて、ゼミ生を募集する。学生は自分の学びたいテーマのゼミナールを選択する。このゼミは「卒業研究」まで一貫している。

2年生の前期には、「演習Ⅰ」に引き続いて「演習Ⅱ」がある。そして、後期からは「卒業研究」となり、ここで各人の卒業論文をまとめることとなる。

次に、「基礎演習」のゼミナール編成についても、簡単に説明しておきたい。

この「基礎演習」は、1995年度の改革で一度は廃止されたのであるが、2年間の教育実践の結果、「基礎演習」は入学当初の友だちづくりの基礎単位としてやはり必要ということで、1997年度に復活した科目である。

1997～98年度の2年間は、教員の負担増も勘案して2年に1度、「基礎演習」を担当することになった。つまり、経済専攻3名、経営情報専攻3名の教員が「基礎演習」を担当することとなった結果、1ゼミナールが14～15名という、本学のゼミナールとしてはやや多めの人数となってしまった。

そこで、1999年度は、教員全員が「基礎演習」を担当することにより、1ゼミナールの人数を8～9名と小人数にすることにした。

私は、昨年(1998年)の「基礎演習」では、3冊のテキストを大急ぎで輪読したのであるが、今年はこの3～4年の間に収集した、「女性学」に関するビデオを活用することにした。視覚的でイメージがつかみやすい、「女性学」ゼミナールを創る実験をしてみたいと思ったからである。

また、商経学科でただ一人の女性教員である、垣本先生との合同のゼミナールにしたことも新しい試みである。女性教員と男性教員がジョイントで、「女性学」と「男性学」のゼミナールを運営する、というのがねらいであった。しかし、その結果、ゼミ生は16名とやや多めの人数になってしまったため、後述

するように、ビデオを見た後の討論がしにくいという状況をうむことになってしまった。

Ⅱ. 「基礎演習」において鑑賞したビデオ

まず、「基礎演習」の日程を紹介すると、次のとおりである。

オリエンテーションを含めて、合計12回の「基礎演習」で、14本のビデオを鑑賞して、ゼミ討論を行った。

- 4月21日 オリエンテーション
- 4月28日 「ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」
- 5月12日 「おとことおんなの生活学③ 男女の共生」
「オモシロ学問人生 男らしさにさようなら」
- 5月19日 「おとことおんなの生活学④ 人生のパートナーを求めて」
- 5月26日 「男と女の境界線・その性をとりもどす時」
- 6月2日 「家事戦争・家事は分担すべきか？」
- 6月9日 「シングル・マザー」
- 6月16日 「少子社会ニッポン・第一部」
- 6月30日 「子供を育てられない母親たち」
- 7月7日 「なぜ男の子が救えなかったのか」
「日本人の『買春』に傷つく少女たち」
- 7月14日 「夫が妻を殴る時」
「妻を殴る夫」
- 7月21日 「声とざされて、そして……インドネシアの“慰安婦”たち」

次に、「基礎演習」において鑑賞したビデオについて、紹介しておきたい。まず、「田嶋陽子が語る男と女」は、NHKで放映されている「ようこそ先輩」シリーズの1本である。この番組は、有名人が自分の母校を訪ねて1日教師を

するというものであるが、このビデオはフェミニストとしてTV番組等で有名になった、法政大学の田嶋陽子教授が出演したものである。田嶋氏はあるクイズを出題することによって、小学生でさえも、いわゆる「男らしさ」「女らしさ」の常識にとらわれていることを痛感させる。また、田嶋氏の生い立ち、とくに母との葛藤についても個人史が語られ、なぜ彼女が激的なフェミニストとなったのかの謎も明かされる。

次に、高等学校の「家庭一般」に対応して企画された、NHK教育セミナー「おとことおんなの生活学」から、第3回の「男女の共生」と第4回の「人生のパートナーを求めて」を鑑賞した。「男女の共生」は、社会や文化がつくりあげてきた性差や性役割を見直そうというものである。ジェンダーとセックスの違いを明らかにして、「男らしさ」「女らしさ」に縛られた生き方を乗り越えらるとともに、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担を見直すことにより、男女共同参画社会の実現を求めている。「人生のパートナーを求めて」は、人生における結婚の意味は何か、パートナーに何を求めるかを考えさせようとする。未婚化、晩婚化が進み、離婚率が上昇する中で、従来の結婚観が大きくゆらぎ、とくに男女の結婚観のミスマッチが拡大して、「結婚できない男性」が増えている。それゆえ、結婚は“ゴールイン”ではなく、良きパートナーとしての“スタート”である。

「男らしさにさようなら」は、NHKで放映されている「オモシロ学問人生」シリーズの1本である。この番組は、ユニークな研究者とその研究内容を紹介する番組であるが、このビデオは男性学のパイオニアとして著書『男性学入門』で一躍有名になった、大阪大学の伊藤公雄教授が出演したものである。1990年代は「男性問題」の時代と喝破した伊藤氏が、男性の「自立度」をチェックする方法（「妻のパンツを外で干せますか？」）を伝授しつつ、「男らしさ」の鎧を脱ぐことをすすめるというものである。

「男と女の境界線・その性をとりもどす時」は、最近、話題となっている性同一性障害に悩む男女の物語である。生まれもった男体や女体に違和感をもちつつ、「私の肉体はまちがっている」と、心と身体とが引き裂かれた症状を

もつ人たちに、日本でもようやく医療としての性転換手術が認められた。性同一性障害に悩む3人の男女を事例に、性とは何か、「男らしさ」「女らしさ」とは何かを深く考えさせる好番組である。

「家事戦争・家事は分担すべきか？」は、海外のドキュメンタリー番組である。何組かのカップルを登場させて、タイトルにある「家事は分担すべきか？」をテーマに、生活の実態と二人の思いを縦横に語らせている。女性の家事負担がやはり重いというのが現状であるが、レズビアンのカップルが「男と暮らしているより自由で気楽だ」と語っていたのが印象に残っている。

「シングル・マザー」も、海外のドキュメンタリー番組である。男性の精子が売買されている実態がリアルに描かれており、けっこうショッキングである。既にシングル・マザーになった人、これからシングル・マザーになろうとする人が何名も登場して、その思いを語る。ハイト・リポートで有名なハイト女史や、超保守的な立場の男性も登場し、シングル・マザーをめぐる議論が多彩に展開されている。

「少子社会ニッポン・第一部」は、NHKの2回連続の特集番組の第1回目である。スタジオに30歳代の独身、既婚（子どもあり、子どもなし）の男女数十名を招いて、取材したVTRを見せて、ディスカッションをさせる番組である。少子化が進む原因は何かを明らかにするために、30代の夫婦2組に子どもをつくらない理由、あるいは一人しか子どもをつくらない理由を取材しているが、それがなかなかおもしろい。

「子供を育てられない母親たち」は、民放の「ザ・スクープ」の特集番組である。「できちゃった結婚」などの若すぎる結婚が、子育てのできない母親たちをつくりだす。そして、「男は仕事、女は育児」の性別役割分業が、それに拍車を駆けている。また、愛情を受けて育てられなかった子は、親になっても愛情のある育て方がわからないという、リサイクルの問題が提起されている。

「なぜ男の子が救えなかったのか」は、NHKの「クローズアップ現代」の特集である。義父から3年間暴力を受けて、ついに死亡した5歳の子どもの事件である。母親がわが子への夫の暴力をとめず、第三者には暴力ではないと夫

をかばったという事実がやるせない。また、児童相談所の対応があまりにも遅く、男の子を義父の暴力から救えなかったという、日本の現実が情けない。

「日本人の『買春』に傷つく少女たち」は、民放の「報道特集」の特集番組である。タイの奥地まで取材に入って、10代前半の少女たちの売春の実態を明らかにしている。ミャンマーからタイに売られて、売春を強要される少女たち、そして、その少女たちを買うのが、日本人の中年男性である。

「夫が妻を殴る時」は、民放の「ザ・スクープ」の特集番組である。3組の夫婦が登場し、夫が妻に暴力をふるう実態と、妻の恐怖がよく描かれている。しかし、「夫婦間暴力」を取り扱った他の番組との違いは、妻を殴る夫が登場して、妻に暴力をふるった理由を告白していることである。また、暴力を振るった夫が、妻に暴行を加えた事実を忘れてしまっているという、驚くべきことが明らかにされている。さらに、アメリカでは、妻に暴力をふるえば警察に現行犯逮捕され、その後もカウンセリングを義務づけられるという、日本とは全く違う警察のドメスティック・バイオレンスへの対応が紹介されている。

「妻を殴る夫」は、民放の「ニュース・ステーション」の中の特集である。妻に暴力をふるう夫の実態、アメリカと日本の対応の違いを紹介するのは、ほぼ上記番組と同じである。ただ、この番組では、30年間、夫に暴力をふるわれ続けてきた女性が登場し、その精神療法としての絵画療法が紹介されていたのだが、夫の顔が赤鬼のように描かれていたのが印象的であった。

「声とざされて、そして……インドネシアの“慰安婦”たち」は、民放の「ドキュメント'97」の特集である。朝鮮人慰安婦ばかりでなく、インドネシアにもたくさんの慰安婦が（オランダ人の慰安婦も）いた実態が、年老いた元慰安婦たちの証言によって明らかにされる。イスラム教の影響もあり、慰安婦の存在そのものが覆い隠され、元慰安婦たちは故郷にも帰れず、苦しい生活を続けてきた。ようやく声をあげ始めた元慰安婦たちであるが、日本は正式の謝罪と賠償に応じようとはしていない。

Ⅲ. 学生による「女性学ゼミ」の評価(1)

学生が「基礎演習」における「女性学ゼミ」をどのように評価しているのか、1999年7月に受講生16名を対象にアンケート調査を実施した。回収率は100.0%である。

アンケート項目は四つである。

一つは、「あなたは基礎ゼミで『女性学』『男性学』を学んでよかったですか？」という問いに対して、「よかった、よくなかった、どちらともいえない」から回答を選択した上で、「具体的にどういう点がよかった（よくなかった）ですか？」と問うものである。

二つ目は、「ゼミでは10本以上のビデオをとりあげましたが、その中で印象に残っているのはどれですか？」というもので、ビデオのタイトルと感想を書くための回答欄を設けた。

三つ目は、「男らしさ、女らしさと性役割について、鑑賞したビデオをベースに、あなたの考えを述べて下さい」というものである。

四つ目は、「基礎ゼミについての要望を自由に書いてください」というものである。

以下、アンケートの回答について、順次、紹介していこう。

(なお、第三番目の「男らしさ、女らしさと性役割について、鑑賞したビデオをベースに、あなたの考えを述べて下さい」に対する回答は長文なので、機会を改めて別稿で紹介することとしたい。)

まず第一の、「基礎ゼミで『女性学』を学んでよかったですか？」の問いに対しては、16名全員が「よかった」と回答している。

具体的なよかった点について紹介すると、次のようなものである。

- ・「今まで当たり前だと思っていたことがくつがえされたから。例えば、一番最初に見た田嶋先生の話にあった『子供を手術した医者のお話』ではとても考えさせられた。また、遠い世界で数少ないこととと思っていた『児童虐待』『家

庭内暴力』などを身近なことに感じさせ、考えるきっかけになったから。」

- ・「今まで自分が結婚したらどうするとか考えてなかったし、女だからといって特別不利に思っていなかった。だけど、基礎ゼミでビデオをみたり、皆と話し合うことによって、いろいろ考えるようになった。家庭内暴力のビデオを見たりすると、しっかり将来の人を選ばなきゃなあとか、東南アジアで少女が売られている姿を見たりしたら、女を何と思っているんだろうかとか、たくさん考えさせられるものばかりで勉強になった。学んだことをずっと大事にしていきたいと思う。」
- ・「ビデオの内容にけっこう興味をもてたし、おもしろかった。最近、社会問題として目につくものを学習できてよかった。本や新聞の記事を読むよりも、映像で見た方が理解しやすかったし、ビデオの中に登場する人たちの体験をより身近なものとして、リアルに感じることができたと思う。」
- ・「今まで学んだことのない領域だったため、新鮮だった。ビデオの内容も、現在問題になっていることを取り上げていて、おもしろかった。」
- ・「前々から女性問題に興味があったので、今回ゼミでいろいろなビデオを見たり、他の人の意見を聞いたりすることができたのでよかった。また、『男性学』を学ぶことによって、今までとは違った視点で『女性学』を学ぶことができたのでよかったと思う。」
- ・「今まで『女性学』『男性学』について、こんなに考えたことはなかった。いろんな問題にふれて、いろんな現実を知って、けっこう衝撃的だった。これからの自分自身の生き方、考え方も変わるような気がした。一つ一つの問題について、いろんな人の意見も聞けてよかった。」
- ・「自分が女性だから『女性学』を学ぶのじゃなくて、『男性学』という異性の勉強もできてよかった。ふだんは物事を女性の視点からみて考えていたけれど、男性の立場からみて考えられるようになった。」
- ・「女なので、女はどう考えるのか分かったつもりでいたとしても、男の人のことは分かりようがなかった。このゼミで見てきたビデオのおかげで、少しはそれが分かるようになった。今後はこのような問題を考えるときに、二つ

の方向から見るができると思う。」

- ・「今までほとんど『女性学』『男性学』に興味がなかったが、このゼミを通じてよく知らなかったことなどが学べた。今まで『女性学』『男性学』とかいうようなことを考えたことがなかったので、あまり自分の中で考えがまとまらず、どれがいいのか、悪いのかははっきり分からなかったので、他の人の意見がたくさん聞いたことはよかったと思う。」
- ・「私も『女は家』という古い考えにとらわれていて、『どうせ結婚するんだから……』という夢も希望もない考えをもっていた。だが、『女性学』『男性学』を学んだことで、なんだか未来への希望がもてるようになった。」
- ・「現代が分かり、そしてその点について、みんなの意見を聞いた。考えは人によって違っていたので、そういう考え方もあるのか……と考えさせられることが多かった。また、みんなの意見を聞き、自分の感じたことを述べることで、自分のもっている考えもはっきり分かった。」
- ・「『女性学』と『男性学』は非常に奥が深くて、考えさせられました。自分が生きていく中で、大切なテーマだったので、学んでよかったと思います。」
- ・「『女性の権利』とか、そういう言葉は今までもたくさん聞いたことはあったけど、その問題を一つ一つ具体的にビデオを見ることによって実態を把握することができたし、今まで家事は女の人ができるのは当たり前だと思っていた考えが見事にくつがえり、新しい視点から物事を考えられるようになったことがよかった。」
- ・「今まで『男の子だから、女の子だから』といろいろ勝手に決めつけていることが多いことに気づくことができた。また、ビデオを見て、みんなの意見を聞くことができてよかった。自分と違う意見を聞くことはとてもおもしろく、『こういう見方もあるんだな』と思うことも多くあった。」
- ・「客観的に社会を見つめる視点を身につけられ、自分なりの意見をもつことができた点がよかった。」
- ・「自分と違う考え方をもち人の意見を聞くことができたから。曖昧にしか知らなかった事件をよく知ることができた。」

Ⅳ. 学生による「女性学ゼミ」の評価(2)

アンケートの二つ目の質問である「印象に残っているビデオ」については、次のとおりである。

- 第1位 (12名) 「なぜ男の子が救えなかったのか」
- 第2位 (11名) 「夫が妻を殴る時」「妻を殴る夫」
- 第3位 (10位) 「ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」
- 第3位 (10名) 「シングル・マザー」
- 第5位 (8名) 「子供を育てられない母親たち」
- 第6位 (7名) 「日本人の『買春』に傷つく少女たち」
- 第7位 (6名) 「男と女の境界線・その性を取りもどす時」
- 第8位 (5名) 「少子社会ニッポン・第一部」
- 第8位 (5名) 「声とざされて、そして……インドネシアの“慰安婦”たち」
- 第10位 (4名) 「家事戦争・家事は分担すべきか？」

以下、順に、ビデオの感想を紹介しよう。

① 「なぜ男の子が救えなかったのか」

- ・ 「子どもを殺してしまうくらいの暴力を加えて、『しつけ』と言っているお父さんの無神経さが本当によく分からない。それに、その暴力をうけている子どもを見ながらも、助けようとしないう母親の神経はもっと分からないと思った。そして、父親を警察からかばったということを聞いた時には、もうあきれるといふか、何と言っているか分からなかった。また、それに加えて、児童相談所の対処の遅さもあったから、本当にもう少し早く対処すれば助かっていたことなのだと思うと、すごく悔しかった。誰も頼る人のいない生活をしていて、死んでしまった子どものことを考えると、本当に悲しく思う。」
- ・ 「家庭という密室での子どもの虐待。それに気づいていながら対応が遅れ、

死なせてしまった児童相談所。子どもの大人に逆らえないというつらさを感じた。力ではとうてい勝てないし……。父親の気持ちがわからない。自分の子どもでないにしろ、人の痛みがわからないというのが悲しいことだと思う。」

- ・「児童相談所の対応の遅さに腹が立った。そして、男の子の父親の虐待のすごさにも驚いた。どうして幼い子どもの命を粗末にするのだろうと思った。」
- ・「児童相談所の遅すぎる対応や所長の態度とかが頭にきた。あれでは児童相談所はあってないようなものだ。」
- ・「この事件はニュースで聞いていたけれど、裏にこんなことがあったとは思ってもみなかった。どうしても日本はこういう事件に対する対応が悪い。今後はこういう面も改革していかないといけないのだろう。」
- ・「最近、よく子どもの折檻死というのをニュースで見る。また、虐待をテーマにしたドラマも見て、興味があった。このビデオを見て、まず、なぜ母親は子どもを見捨てるようなことをしたのか、と思った。この男の子はただ虐待で死んだというだけでなく、母親、父親の心理など、もっと深い部分で考えるべきことだと思った。また、日本の児童相談所（というより大人たち）の対応にも問題があると思った。児童相談所といっても、人事異動のために家庭訪問を遅らせたり、所長が自分には関係がないというような話し方をしているのを見て、本当に児童のことを考えているのか疑問に思う。虐待を受けている子は日本に多数いると聞く。どうすればその子たちを助けられるのか、またその数を減らせるのか、考えさせられる。」
- ・「役所の対応の悪さと日本のシステムの未発達がはっきりと現れた事件だった。幼い命が奪われたのだから、これからはこのような問題が解決されるような対策を作らなければならないと思った。子どもは親を選ぶことができないけど、このビデオを見て、子どもが親を選べればこの男の子は死なずにすんだのにと考えた。」
- ・「再婚相手が自分の子どもに暴力をふるっていたのを知っていたにもかかわらず、見て見ぬふりをしていた母親。私は、『親は死ぬ気で子どもを守るの

が当然だ』と知っている。暴力にあっていた子どもも、心のどこかにその思いがあったと思う。暴力をふるわれていることよりも、その思いが裏切られてしまったことの方がつらかったのではないだろうか。」

- ・「日本のプライバシーを重んじる姿勢が、家族という囲いの中に、子どもを閉じ込めているのが怖かった。また、しつけと虐待との境界線を見きわめる、役所の怠慢に腹が立った。」
- ・「このビデオは前にもみていたので、二度見たことになる。最初に見た時は、とてもあきれた。虐待が行われているとわかっていながら、対処の仕方が遅すぎて、結局、幼い命を救えなかった。あまりにも情けない話だと思った。幼い子はどうすることもできないのだから、もっと重大な事として反省し、これからの対処を考えてほしい。」
- ・「非常に怒りを感じた。男の子を唯一救える立場にあった、児童相談所の対応の悪さを目のあたりにして、不満に思った。それ以前に、母親がなぜ助けられなかったのかと思った。」
- ・「虐待の事実がわかっていながら、男の子を救えなかったのが、とても残念でした。あと1日でも早く児童相談所の人が家を訪れていたら……。なぜあんなに日本の公的機関の対応は遅いのか、疑問に思います。また、男の子の母親が、夫の虐待を見ながら『自分がやった』と夫をかばうのも、何を考えているんだ！と怒りがこみあげてきました。自分のかわいい子どもが殴られていたら、私だったら耐えられません。母親は夫の気を引く、一人の女になっていたのですが、子どもがいるのにそれはないだろう、と思いました。義父も幼い子どもを死なせるほど虐待するなんて、彼の良心はどうなっているのだろうと思いました。ビデオの中で児童相談所の所長が説明していましたが、何だか自分には関係のないことというような態度で、すごく無責任だと思いました。面倒なことには関わりをもちたがらないことを、悲しく思いました。その態度が、男の子の命を奪ったような気さえしました。」

② 「夫が妻を殴る時」「妻を殴る夫」

- ・「このビデオを見てまず感じたのは、アメリカと日本の対処の差だった。アメリカは電話があればすぐ警察が来てくれたのに、日本は夫婦ゲンカということで相手にもしてくれない。こういう面で、もっとアメリカを見習うべきだと思った。また、『結婚してしまえば、妻も子も自分のものだから、何をしてもかまわない』と言っている人がいることにショックを受けた。それが間違っていることは誰でも分かる。自分のものだから暴力を加えてもいい、そう言われて納得する人はいない。妻も一人の人間としてみるべきだ。」
- ・「怖いと思った。結婚しないとわからない夫の暴力。力ではどうしても男の人に負けるのは当然だと思う。夫の心理の告白もいろいろあったけれど、実際に自分が結婚したときにもありえることなので怖い。アメリカであれだけ夫の暴力は許さない！という形ができていのに、日本では……。暴力には違いないのだから、もっと日本を見直さなくてはならないだろう。カウンセリングももっと広まればよいと思う。」
- ・「暴力を使って相手を黙らせるというのは、卑怯だと思う。殴る夫は、妻が自分の理想になっていないからという理由で殴っていたけれど、自分が妻の理想にかなっている夫であるか、考えたことはあるのだろうか。本当に自分勝手だと思った。」
- ・「妻を思いきり殴っているのに、それを大した事じゃないと思っている夫がいることが信じられない。そして、アメリカの警察の対応の厳しさにもびっくりした。」
- ・「私の家では父が母を殴るということがないので、ビデオを見て驚いた。殴る夫の側の心理や、妻を殴る夫に対するアメリカの対応が印象に残った。」
- ・「世間ではいい人を演じているのに、家の中では気が狂ったように暴力をふるう夫に変わる人は、すごくこわいなあと考えた。奥さんがこのギャップが恐ろしいと言っていたことにすごく共感できた。」
- ・「妻を黙らせるために暴力をふるい、そのことを覚えてもおらず、反省もな

い夫に恐怖を感じた。何かと不満やイライラ感のつもの現代で、家庭をそのはきだめにしているのだろうかと思った。男性と女性の考えの違いを認められるようになれば、改善されるのだろうか。」

- ・「夫が妻に暴力を働いたことを覚えていない、というのが信じられなかった。妻は体だけでなく心までも傷ついているというのに、夫はその行為に対する罪悪感を感じていないのはずるいと思った。結婚について考えさせられた。」
- ・「30年以上、夫の暴力に耐え続けた女性の描いた絵が、憎悪に満ちていて、とても印象に残った。今まで離婚すればいいのにと簡単に考えていたけれど、経済的な理由、子供の存在など、簡単ではないのだと思い、結婚はよく考えてしようと思った。」
- ・「私は、基本的には、夫が収入を得て、妻が家事をするべきだと思う。しかし、お互いにそれが当たり前だと思ってしまうと、夫婦崩壊のきっかけになるのではないかと思う。お互いに感謝の気持ちを忘れないことが大切だと思った。また、すぐ暴力をふるうのは最低だと思った。子どもはそういうことにはけっこう敏感なので、子どもにも悪い影響を与えると思う。」
- ・「以前に、『男は女より弱い生物だから、神様は男に腕力を与えた』と、いうことばを聞いたことを思い出した。夫が妻を殴った記憶があまりはっきりしないということに驚かされた。」
- ・「愛しあって結婚したはずの二人が、暴力という行為をきっかけに加害者と被害者になるというのが、とても怖いことだと思いました。また、加害者である夫が、自分のした行為を認識していないことにも驚きました。被害者である妻は、大きな心の傷と体の傷の両方を負わされ、とても苦しんでいたように思います。ビデオの中で、数十年にわたって夫の暴力に耐えた女性が、絵を描くことで自分の内にある気持を表現していましたが、その絵はとてもおそろしく、その女性の心の傷を象徴しているように思いました。男性に力という武器を使われては、女性はどうしても太刀打ちできません。男性はそのことを再認識する必要があると思いました。また、暴力をふるった夫への対処が、アメリカと比べるととても遅れていると思いました。日本もアメリ

カのシステムを早く取り入れるべきだと思います。そして、暴力をふるったことへの反省が、適切に行われるようにならないといけないと思います。暴力をふるってしまった後、男性がそのことをきちんと認識しないと、再び暴力をふるうことになると思うからです。」

③ 「ようこそ先輩 田嶋陽子が語る男と女」

- ・「私は、今まで男の役割とか、女の役割とか、考えることに全く興味がなかった。でも、このビデオを見て、自分が男の役割とか、女の役割とかを無意識のうちに区別していることに気づいた。これからは、そういう考え方を変えた方がよいのでは、と思うようになった。田嶋先生は、考えすぎと思う部分もあったが、自分を認めてもらうという強い意志はいいなと思う。」
- ・「今まで深く考えたこともなかった、女らしさや男らしさということについて考えさせられた。あの小学生の絵も、やっぱり男っぽい、女っぽい職業というのがでていて、自分でも納得してしまった。確かに、私たちもそういった考え方があるなと思った。」
- ・「田嶋さんは、少し被害妄想が激しいようにも思ったけれど、女らしさ、男らしさとは何なのか、何を基準にそう決めつけられているのか、を考えさせられた。」
- ・「田嶋先生のごことは前々から知っていたし、男の人に偏見をもっていたのを知っていた。このビデオを見てその理由を知ることができて、彼女に対する見方が変わった。」
- ・「田嶋さんの話を聞いて、自分も『男らしさ』『女らしさ』にとらわれていたことに気づいた。田嶋さんがどういう人なのか、知ることができた。」
- ・「私はこのビデオを見る前は、田嶋先生が嫌いだった。私には、はっきり言って、彼女が女性だとは思えなかった。だが、ビデオで彼女の考えを理解していくうちに、『彼女が女性であるとは思えない』という思いは、実は『女性はこうあるべきだ』という私の固定観念からきていることに気づかされた。」

改めて彼女の言動に注目してみると、以前とは全く違ったとらえ方ができて、嫌いだった田嶋先生が、好きになってしまった。」

- ・「田嶋先生が小学生に質問した、『子どもの手術をした医者の話』にとっても考えさせられ、気づかなかった自分を情けなく思った。また、この話を友だちに語った。」
- ・「『男女平等』ということばが叫ばれていて、男女平等になってきている気がしていたが、まだまだ男女の差別があることに気づかされた。『男女平等』というテーマは奥が深く、考えさせられた。」
- ・「田嶋陽子という人の意見を初めて聞いたのだが、そのこだわりに深さに驚いた。」

④「シングル・マザー」

- ・「結婚したくはないが子どもは欲しい、という女性が増えてきている現代で、そのような考えに行きついた女性たちに興味があった。自分の生活を変えたくないとか、個人の自由とか、いろいろ理由があったが、女性の社会進出が発展し、女一人でも生きていけるという、強い女性が増えていることに刺激を受けた。」
- ・「このビデオに出てくる女性たちは、結婚はしたくない、でも子どもは欲しいと言っていて、わがままに思う人もいるかもしれないけど、こういう生き方もあるんだと思った。でも、精子の売買があんなに盛んなのには驚いた。」
- ・「外国では精子を売買し、その精子で実際に子どもを産んでいる人がいることが、考えられなかった。『相手はいらないけれど、子どもは欲しい……』今の私だとこんなことは考えない。精子を買うのにも、相手の性格や身体的特徴などを選んで買う、というのに少し違和感があった。でもやっぱり私としては、頼れる人（相手）がいなければ子どもを産む勇気はないと思う。」
- ・「このビデオに出てきた女性は強いなと思った。やはり強さがなければ、シングル・マザーはつとまらないと思う。男性を頼らず、自分一人で子どもを

育てていこうという強さに惹かれる。しかし、その子どもとしては、片親というのは少しかわいそうな気がする。子どもにはいろいろな面から両親は必要だと思う。精子を買って、人工授精という方法を使っていた人がいたが、父親が全くわからないことは、いいことでありそうな気もするが、あまりよいことではないような気もする。日本ではシングル・マザーはまだ受け入れられていない。このビデオに出てきた人たちはみんな外国人だった。でも、これから日本でも、シングル・マザーが受け入れられるようになると思う。その時は、あまり軽い気持ちではなあってほしくない。産まれてくる子どもと、本当に一人で向き合っていけるのか、ちゃんと考えてほしい。でなければ、子どもに父親がいないというつらさを背負わせることになると思う。」

- ・「シングル・マザーが増えていることに驚いた。中学生の頃は私も、子どもは欲しいけど父親になる人はいらなと思っていましたが、やっぱり父親は必要だなあと改めて感じた。」
- ・「自分自身あまり結婚したいとは思っていないし、子どもを産みたいとも思っていないので、ビデオに出てきた人たちの意見はすごく新鮮に感じた。」
- ・「ビジネス化した精子のやりとりを見たのが、すごく印象に残った。シングル・マザーの考え方や、その人たちを見守る周りの人たちの話がおもしろかった。」
- ・「女性が社会的に自立し、高収入を得られる時代になったからこそ、シングル・マザーが目立つようになったと思った。人工授精をしてまでシングル・マザーになろうとする女性に共感もてなかったけれど、人それぞれの生き方だなあと思った。」
- ・「私は今まで、結婚したいと思える男の人に会えなかったら、精子バンクを利用して子供を産んでも、深く考えずに、いいと思っていた。でも、やっぱりそうやって産んだ場合、経済的な問題、何よりも子供の自立の問題がかかわってくると思ったとき、たくさんの覚悟を強いられるなと思った。」
- ・「私は、シングル・マザーがよい、と言う人たちの意見には猛反対である。母親だけだと、一人で収入も得て、家事もしてとなると、やはり子どもと接

する時間が減ってしまう。子どもにとって父親の存在は大切だと思う。自分にとって都合がいいからではなく、子どものことを一番に考えてほしい。」

⑤ 「子供を育てられない母親たち」

- ・ 「自分の子どもだというのに、自分の子どもだと思えない、かわいくない、自分のほうが甘えたい……、そんな母親たちを見ていると、自分勝手だと思う。自分自身、子どもを産んだこともないから、自分が実際どういう気持ちになるかはわからないけれど、自分の子どもなら（自分の子どもでなくても）かわいく思うだろう。でも、育て方がわからなくて、だれにも頼ることができないというのも、なんだかさみしい気がする。」
- ・ 「自分の子どもなのにどうして育児ができないのか、不思議に思った。自分が遊びたいからというのは無責任で、母親の資格などないと思う。自分が産んだからには、母親のつとめを果たすべきだと思った。CMであった『育児をしない男は父とは呼ばない』というセリフの、母親バージョンを流してもおかしくないなあと思った。」
- ・ 「初めから『子どもが欲しい』と思って産んだわけではなく、できてしまったからしかたなく産んだという人や、自分が小さい頃、親に愛情を注がれなかった人が、子どもを育てきれなくなってしまっていたけど、もっと命の大切さとか尊さを知るべきだと思った。」
- ・ 「現代はこのビデオに出てきた親たちのように、『愛情をかけられて育っていないので、自分の子どもにどうやって愛情をかけたらいいのかわからない、自分の方が愛をもらいたい』という、いわゆるアダルト・チルドレンが数多く存在している。そういう親に育てられた子どもは、一体どうなるのかと思った。」
- ・ 「夫が産んでほしいと言ったからとか、安易な理由で子供を産み、邪魔だから物のように子どもを捨てる、母親とも言えない女の人に、同じ女性として許せない怒りを覚えた。子どもを産むのだったら、責任をもってほしい。」

- ・「子どもを産んでも、母性本能に目覚めない女性たちに驚かされた。私はこういう女性たちは病気なのだと思います。子どもを産んでも母親になれない女性たち、このような女性たちに育てられた子どもも、また子どもを愛せない親になると思った。」
- ・「わたしは親子だからといって、絶対に仲がいいものとは思っていないけれど、仲の良し悪し以前に、自分の子を人間としてみず、持ち物のように扱っているのが怖かった。」
- ・「このビデオでは、若くて子どもを産んだが育てられず、施設に預けている若い母親たちが登場していた。私は、この女性たちはあまりにも赤ちゃんのことを軽く考え過ぎている、と思った。子どもが邪魔だの、かわいくないのだのと言える神経にはびっくりした。このような若い母親が増えているということがショックだった。」

⑥「日本人の『買春』に傷つく少女たち」

- ・「このビデオは衝撃的な出来事ばかりで、とても印象的だった。まず、ショックだったことは、親が子をお金のために売るということだった。それに、その売られた子にはお金はほとんど与えられないということを知り、私はこの子たちを何と知っているんだろうと感じた。ただ、男の人の欲求を満たすだけの道具としてしか考えられていないのかなと思うと、すごく悲しかった。あと、裏で警察が動いているということも信じられなくて、腹立たしかった。」
- ・「自分よりも若い女の子がタイでは売り買いされ、売春をさせられていることに、見ていて胸が苦しくなった。それを買う日本人の中年男性がいるということ、親によって売られ、家に帰っても娘として迎えられなかったこと、そして、その少女は一人で暮らし、AIDSと一人でたたかっていること、そのすべてのことが本当に信じられないような、でも現実にあることなんだと考えさせられた。」
- ・「このビデオを見て私が最も衝撃を受けたのは、売春を強制されている少女

たちがまだ12歳ぐらいだということです。まだ小学生です。売春させられて、おまけに性病までうつされるというのは、どういうことだと思った。『2～3日すれば処女が入りますよ』と説明している人を見ると、腹が立つどころじゃない。しかも、客のほとんどが日本人というのは、やるせなさを感じさせる。こういうことは絶対に見逃してはいけないと思った。」

- ・「少女たちのあまりの幼さが、とてもショックだった。そして、日本人の客が多いということが、何とも情けなかった。このビデオに出てきた、一人の女の子がとても印象に残っている。せっかく親元に帰れたのに、親に冷たくされ、一人で暮らしているのを見た時、涙が出た。」
- ・「日本人男性が東南アジアの女の子をお金で買っているという事実を知って、情けなく思った。また、現地の警察と売春組織が癒着しているというのが、ショックだった。そんなことをしたら警察の意味がなく、どうしようもないなと思った。自分より幼い子たちが今でも売春を強いられていることを知って、何とも言えない気持ちになった。」
- ・「少女たちの年があまりに若くて驚いた。あの少女たちはエイズ感染の予防もされず、もののように扱われかわいそうだった。うそがバレバレの警察官は、態度が余りにも偉そうで頭にきた。」
- ・「昔、聞いたタイの少女売春の話进行思い出した。買う人がいるから、売る人がいる。それ相応の年齢も経験もある女性を集めた店があるのに、子どもを買うといったタブーを平気で犯す大人がいるのは、とても情けなかった。」

⑦ 「男と女の境界線・その性をとりもどす時」

- ・「最初に出てきた山本さん（男）には本当に驚いた。そして、性同一性障害に悩んだり苦しんだりしている人が意外と多いことに驚いた。」
- ・「男の人が女性になりたくて、中学生の変声期に声が低くならないように、高い声を出し続けたというのが印象的だった。また、海外で手術をしてまで、男性になりたかった女性に、そこまでさせたものは何だったのか、という思

いがした。」

- ・「自分の努力で声を高く保っている，見かけはどこから見てもおじさんの人や，男でも女でもなく中性でありたいというダンサーの人などは，自分のまわりにはいなかったのでも今まで意識しなできたけれど，ビデオを見てそれでも違和感なく感じられた。」
- ・「最近，日本でも性同一性障害に悩む人々が性転換手術を受けることが可能になった。ビデオを見て，性同一性障害が重い苦しみであることがよくわかった。外見は男性だけど，女性として生きている人々が，堂々としている姿がかっこよかった。」
- ・「今まで自分の性が違うというのは，精神の問題と思われていたことが，実は体の問題であると大きく変わったのがおもしろかった。」

⑧ 「少子社会ニッポン・第一部」

- ・「自分の趣味を楽しむために子どもはいらない，子どもがいると自分の時間がなくなる，と言っている人がいた。私はその意見に賛成で，すごく印象に残っている。こういう意見の人が子どもをもつと，今増加している児童虐待につながると思う。自分のために子どもをもたないというのも，一つの手かもしれないと思わされた。」
- ・「自分にもかかわることだと思った。子供を一人しか産まない理由，子供を一人も産まない理由，どちらも自分も考えそうなことだと思ふ。結婚しない理由としても，社会自体が結婚する女性にとって不利な状況にあるのは現実だろう。少子化を防ぐこともだけど，女性もずっと働けて，子どもにもそんなにお金のかからない社会ができれば，自然と子供は増えるのではないかと思ふ。」
- ・「今の30代の人たちの考え方にびっくりした。『子どもがいない方が自分の時間が持てる』『子どもはお金がかかる』などと，子どもをもつことのデメリットが多くあげられていたが，それ以上にメリットがあると思ふ。『少子社会』

という問題をあまり身近に感じたことが今までなかったけれども、難題であると思った。人それぞれの考え方だから、解決方法が思いつかない。」

- ・「子どもにあんなにお金をかけるなんて、とびっくりした。そして、週の半分以上はお稽古事に通っていると言っていたのを見て、子どもも疲れてストレスがたまってくるんじゃないかと思った。親は親ばかりと言えはすむが、子どもはたまったものじゃないと思う。」
- ・「私は、結婚したら子どもはもつものだという考えがあったので、ビデオを見てとても驚いた。その中でもとくに、一人の子どもに月15万もかけている家族があったけれども、果たしてそれがその子のためになるのか、将来、親の期待に押しつぶされてしまうのではないかと疑問に思う。また、50代と30代とで考え方がまったく違うのも、心に残った。」

⑨ 「声とざされて、そして……インドネシアの“慰安婦”たち」

- ・「ビデオを見ていて胸が苦しかった。女性として怒りを感じるし、許してはいけないことだと思った。また、それを行っていたのが日本であると思うと、つらかった。日本は、このような悲惨な行為を二度と繰り返さないためにも、徹底して調査し、謝罪するべきだと思う。これまで見た中で一番ショッキングだった。」
- ・「高校の授業で従軍慰安婦の存在は知っていた。ビデオを見て、やっと“声を出す”ことができたのに、またそれが閉ざされるのかと思うと、やりきれなさを感じた。」
- ・「従軍慰安婦というと、アジアの人々が多かったが、オランダ人もいたことは初めて知ってびっくりした。お金では解決できないなあとすごく思った。」
- ・「“従軍慰安婦”の問題について、高校の時に少しだけ習ったのを思い出した。社会の先生は、『本当は戦争に行く人は一定期間戦場へ行ったあと、休みをとらなければいけないのに、日本軍は休みをとらせず、“慰安婦”を使って精神面を安定させようとしていた』、みたいなことを言っていた。日本軍の

人も、今、正常に戻った人は、きっとすごい罪悪感にとらわれているだろうと思う。やっぱり戦争が何もかもいけないのだと思った。」

- ・「高校時代、韓国の従軍慰安婦などについて、先生と論争した内容がまたよみがえってきた。償いはお金でなかったら何なのかしら、と改めて考えさせられた。」

⑩ 「家事戦争・家事は分担すべきか？」

- ・「このビデオの家事を分担している夫婦を見て、私が結婚する時はこんな風に家事を分担する夫婦がいいと思った。ただ楽だからとかいう理由ではなく、お互いを尊重しあっているということを感じたからだ。夫が『トイレ掃除は絶対イヤだ』と言っているのを見て、いやなことを妻にさせていると思うと、尊重しあっているとは思えない。そういう風に考えると、私は家事は分担すべきだという意見に賛成である。」
- ・「私の父はあまり家事を手伝う方ではないので、いつも母が一人で忙しそうに動いているように見えて、私としてはなぜ家事は女だけがやるのだろうと、疑問に思っていました。このビデオの中で、欧米の男性が妻と家事を分担している割合が多いのを見て、日本の男性も見習ってほしいものだと思います。一つの家に住んで家族として暮らしている以上は、家事はみんなでやるべきだと思います。男性たちはもっと積極的に家事を手伝うべきだと思います。このビデオを見て、その思いはいつそう強くなりました。」
- ・「私は家事は分担すべきだと思っている。ビデオの中で、理想の家事分担を描いたアニメーションがあったが、あれがおもしろかった。」
- ・「このビデオを見た後のみんなの意見が、人それぞれでおもしろかった。みんなの意見では、分担する方がいいという意見が多かった。私はその意見に別に反対ではないが、基本的には、妻がしてあげるのが一番いいのではないかと思う。でも、感謝の気持ちは忘れてほしくない。」

V. 学生による「女性学ゼミ」の評価(3)

最後に、「基礎ゼミについての要望」である。

まず、ビデオを鑑賞してディスカッションという、今回の基礎ゼミの形式についての意見を紹介しよう。

- ・「本を読んだりするよりも、ビデオで見た方が理解しやすいのでよかった。」
- ・「ビデオを見て、みんなの意見を聞いたりすることは、今まで何となくしか考えてこなかったことをいろいろ知ることができて、とても勉強になったし、楽しかった。これからも、この形式を続けていっていいと思う。」
- ・「ビデオを見て討論するという形式はとてもいいと思った。でも、ビデオが1時間ちょっとで、討論の時間が30分ないぐらいだったので、もう少しみんなの意見が聞きたいなあ、というところでいつも終りだった。討論の時間をもう少し増やしてほしかった。」

以上のように、「ビデオ+討論」という形式については、おおむね賛成意見が多かった。しかし、討論するには合同ゼミの16人では人数が多すぎる、との意見が多かった。

- ・「初めの頃は“討論形式”にすごく抵抗がありました。でも、少しずつではありますが、自分の意見を述べられるようになってよかった、と思っています。ただ、合同ゼミであったため、人数が多すぎて、討論の形式は困難でした。もう少し小人数であったなら、討論形式はよりいっそう円滑に進んでいったらろうと思いました。」
- ・「最初は討論がすごく嫌だったけど、最近は慣れてきたように思います。でも、やっぱり自分から発言するのはちょっと気が引けてしまいます。ゼミのなかまや先生たちと、気軽に話せるような雰囲気をつくるのが、大切なよ

うに思います。」

- ・「討論で意見を述べるのは、あがり性の私にとっては、言うまでドキドキ、言う時は頭真っ白で大変でした。でも、このような機会があり、本当によかったと思っています。もっと小人数で、みんなが親しくなれば、もっと討論できたかもしれないと思いました。」
- ・「やっぱり、人数は少ない方が意見を出しやすいと思う。」
- ・「討論の時、みんなと離れすぎていると話しづらいので、もう少しみんなと間隔を狭めて討論するといいと思います。」

他方、人数が多い方がよいという意見も少数ながらあった。

- ・「2つのゼミを一緒にしていたが、大勢だと多くの意見が聞けるのでよかったと思うが、反面、自分の意見が言いにくいというのもあった。」
- ・「合同ゼミの方が様々な意見が聞けてためになった。」

やはり多数派は、人数が多すぎて意見がいいにくかったということである。そのほかの意見には、次のようなものがあった。

- ・「NHKやニュースだけでなく、テーマにそった映画などを見たかった。」
(篠田節子原作のNHKドラマ「女たちのジハード」を準備していたのだが、残念ながら時間がなかった……筆者注)
- ・「男女の問題から発展して、社会の諸制度の見直しについても考えられるようなゼミもいいと思う。」
- ・「5限目ではなく、1, 2, 3限目ぐらいにしてほしい。」
- ・「みんなは『夫婦別姓には賛成だが、自分は夫の姓で……』と言っていたが、私にはみんなが理由もなく漠然と答えていたように思えた。そういう点を先生たちはもっと追及していった方がいいんじゃないでしょうか。」

おわりに

これまで紹介してきた、学生による「女性学ゼミ」の評価によれば、ビデオの活用による視覚的でイメージがつかみやすい「女性学」ゼミナールは、何とか及第点はもらえそうである。ただ、もっと見せたいビデオがあったのに、時間の関係で割愛することになったのは、いささか残念である。

一方、反省点はいくつかあるが、最大の課題は、学生たちも指摘していたように、人数が多すぎて討論がしにくかったという問題である。当初は、人数が多い方がたくさんの人の意見が聞けていいだろう、16人もいればユニークな意見を言う学生もいるだろう、と想っていたことであつた。しかし、ビデオ鑑賞のあと、「さあ、討論しましょう」と言っても、意見が出てこない。そのため、最初はやむをえず、垣本先生と私とのおしゃべりがつい長めになってしまった。

「女性教員と男性教員がジョイントで、『女性学』と『男性学』のゼミナールを運営する」という当初のねらいはよかつたと思うのだが……。

小学生から高校まで、ゼミナールのように、互いに意見を表明して討論するという訓練を受けていないから、やむを得ないのかもしれないが、結局、学生からは自発的に意見が出されることはなかつた。そこでやむをえず、指名をして意見表明をさせることにしたが、あててもなかなか意見が言えない、しかし他の人が発言している時には私語をする、という最初は大変な状況であつた。しかし、基礎ゼミも終盤に近づくと、ようやく学生も慣れてきたのか、少し意見が活発にでるようになった。うまくいきたかなと思つているうちに、基礎ゼミは終わってしまった、というのが私の率直な感想である。

「ビデオ+討論」という枠組みと、選択したビデオの内容は好評なので、来年は小人数による徹底討論を試みたい。まず、視聴覚室でビデオ鑑賞、その後、小人数に別れて討論ということで、図書館の構造から考えて、視聴覚室の前と後ろ、共同研究室、図書館長室の4ゼミに別れて討論をすることが可能だ。

最後に、このプランに賛同して、基礎ゼミの共同運営をしてくださる先生を募集します。